音と音楽の間（私の音楽遍歴　幼児期～小学校編）

―最終講義講義録（2013.02.10.）―

千　葉　潤之介
（本学大学院教育学研究科）

Final Lecture at Hiroshima University

Jun'nosuke CHIBA

はじめに

本稿は平成25年2月10日に広島大学教育学部音楽棟F101室において開催された「千葉潤之介最終講義」の講義録である。講義録ではあるが，あらかじめ用意した講義原稿に加筆修正を施したものなので，講義当日の語り口とは異なる部分が多い。当日は持ち時間や講義進行の都合から，アドリブを入れたり，割愛を余儀なくされた内容もあるが，本稿ではそれらも含めて，元原稿の内容に即して復元している。ただし，当日に講ずることができなかった中学校時代以降については，ここには反映されていない。ご了承願いたい。

平成16年4月に音楽学研究者として本学に赴任し，9年の歳月を経て最終講義を講ずる立場になった自分自身の半生には，その節目節目に現在を暗示するようななにか痕跡のようなものがあるのではないかという漠然とした思いがあった。これが今回こうした内容の講義をしたかった趣意である。いい機会なので，講義当日の3週間ぐらい前から，自分の頭のなかにある記憶の引き出しをひとつひとつ開けてみてパソコンにメモをするという作業を続けていたが，講義1週間前ぐらいになって，とんでもなく大きな引き出しを開けてしまったらしく，膨大な量の記憶があとからあとから奔流のように溢れ出るという体験をした。急いでかき集めはしたが，メモが追いつかずに流出してしまった記憶も少なくはないと思う。当初は，今日に至るまでの私の音楽体験を面白おかしくざっくりとお話ししようという心積りであったが，上記の事情のために方針を変えて，出生時からの細かな記憶を順番にたどりながら，時間内にお話しできるところまでを講義の内容とすることにした。この機会を逃すと，もう思い出せないかもしれないという危機感が芽生えたからである。したがって，当日配布のレジュメのようなものに記しておいた「社会人」以降のお話は，出席してくれた大多数の方々が興味津々だったかもしれないにもかかわらず，とうぶんお預けということになってしまった。お詫び申し上げる次第である。このような内容の講義でも，現役の学生諸君や卒業生諸君のこれからの人生に，なんらかの示唆を与えることができれば，講師としては本望である。

人間というのは，自分に都合のよいことのみ記憶して美化し，都合の悪いことは歳月とともに勝手に淘汰して忘れてしまうものである。さらに，人から聞いた話を長い時間をかけて自分の記憶として再構築し，記憶の引き出しに仕舞い込んでしまうということも大いにあり得る。それらは今回の講義内容にも完全に当てはまるので，あるいは自分に都合のよい自慢話めいたエピソードなども少なからず散見されることと思うが，その点については笑い飛ばすか目をつぶって不問に付していただきたいと切に願っている。

1. 弘前時代　昭和24年～昭和29年

1.1. 導入

1.1.1. 出生

私は昭和24年1月23日，青森県弘前（ひろさき）市和徳（わとくまち）町3番地にて出生した。2歳年上の姉がいる。戦争が始まったころ，両親は東京の世田谷区松原に居住していたが，諸般の事情から昭和17年11月に京都へ移住した。しかし，戦況の悪化とともに郷里弘前からの物資が次第に届かなくなり，結局20年2月，弘前への疎開

を余儀なくされた。終戦後もそのまま郷里に居候する身分を続けたため，そこでの出生となった。

1.1.2. 父

なんでも父（大正元年生）は若いころ肺浸潤を患ったようで，そのおかげで兵役免除となっていた。出征してお国のために戦い，ひどい目にあった人たちから見れば，帝国臣民の風上にもおけない非国民である。この父は上野の東京美術学校（現・東京藝術大学美術学部［日本画専攻］）を中退している。同郷の親友に藝大名誉教授となった工藤甲人がいる。中退の理由ははっきりしない。「千葉，態度が悪い」と教官から怒られたので，気分を害してやめたと言っていたような気がするが，本当かどうかはわからない。思うに，金持ちの道楽息子の趣味だったようである。父の師は山川秀峰（鏑木清方門下。伊東深水と同門）である。山川秀峰門下の同期に挿絵画家として名を成した志村立美がいる。

1.1.3. 家

千葉家は明治以来，味噌の醸造業を営んでいた。当時，青森県下1位だったとだれかが威張っていたように思うが，検証はしていない。父方の祖父は婿養子だが商才に長けており，とくに株相場の勘は天才的であったようで家は裕福であった。その次男坊が父である。次男坊の一家（つまり私の家族）は，表通りにある本家の裏の「離れ」と呼んでいた津軽藩の武家屋敷に居住していた。平屋で（武家屋敷に2階などない），現代感覚からするときわめて不便な造りであった。だいたい，厠（トイレ）の位置が北側の端の暗くじめじめした場所にあり，坪庭に面した曲がり角のある長い廊下を渡るか，あるいは，いくつかの部屋を通過しないとたどり着けないし，そのいくつかの部屋が無駄に広い。冬はトイレに行っているあいだに凍える可能性があるので，もっぱら「おまる」を使った。ちなみに，当時は部屋全体を暖めるという習慣はなく，暖房は炬燵と火鉢のみである。したがって，室内でもほぼ戸外と同様の厚着をしないと過ごせなかった。

1.2. ねぷた祭りの思い出

1.2.1. ねぷた

幼児期における弘前での鮮烈な思い出は3つある。1つ目はお城の桜［図1］，2つ目は父が道楽で所有していた大きなアコースティック方式の蓄音機と大量の洋楽SPレコード（後述），3つ目は「ねぷた祭り」（8月1日～7日）である。

幼児にとってねぷたの印象はとくに鮮烈で，内側からの灯りで浮かび上がる巨大な扇灯篭に描かれた武者絵はおどろおどろしく，ねぷたとは恐ろしいものであるという観念が刷り込まれた［図2］。といってそれを見るのを拒否したわけではなく，向こうからねぷたがやってくる様子を察知すると，じっとしていられず，泣いて母親を促し，表通りに出たまではよいが母の陰に隠れて，おそるおそる見物していた。怖いもの見たさというやつであろう。そのせいか，私が小学校低学年のころに描いたねぷた絵には，例外なくオバケが描かれていた。

図1　弘前城の桜。左後方は岩木山

図2　ねぷた

ついでながら，父も弘前在住中にねぷた絵を描いていた。画面が巨大なので，本家の空いた味噌蔵を使っ

ていたようである。もう少しで完成というところで，3歳ぐらいの私が画面に墨をこぼしてしまった，などというエピソードもある。私も幼いころは，現在からは想像できないような悪ガキであった。この悪ガキは小学校低学年までは続いたと思う。

1.2.2. ねぷたの太鼓

ところで，ねぷたにつきものの囃子にも大きく興味をひかれた。母親の背中に負ぶさっていたというから，1～2歳のころだと思うが，子供用のねぷたの太鼓を買ってもらうことになり，店へ連れて行ってもらったところ，母親の背中から身を乗り出して，自分の小さな手で叩いてみて音を吟味し，買う太鼓を決めたという。むろんあとから聞いた話である。母親は「この子は音に敏感である」と断じたらしいが，まずは親バカの始まりといえよう。

4～5歳のころは三輪車に乗って近所を駆け回っていた。幼稚園には行っていない。周りに世話をしてくれる人や教育してくれる人が大勢いたので，その必要がなかったのである。たんに出費を控えただけかもしれない。前述の太鼓はそのころもまだ現役で，8月のねぷた祭りが終わっても祭りの興奮冷めやらず，ヘタをすると9月に入ってからも，三輪車に乗って近所を叩いて回っていたらしい。あまりのやかましさに，近所のだれかよその人が叩けないように太鼓を私の背中に括りつけて帰してよこしたことがあったという。気持ちはよくわかる。それを知った年長の従兄が憤怒のあまり血相を変えて，括りつけた人のところへ怒鳴り込みに行ったという話を聞いた。

1.3. 弘前時代の音楽環境

1.3.1. クレデンザ

ねぷた囃子の太鼓についてはすでに述べた。弘前時代の音楽環境のもうひとつは，父が所有していた蓄音機である。

あとから知った話だが，終戦直後の弘前では，疎開組のインテリたちが集まって，クラシック音楽の鑑賞会をやっており，父の書斎（アトリエ？）が会場になっていたようである。この書斎は武家屋敷の玄関近くに建て増しされていた10畳程度の洋間であった。会の名称は「ウィーン倶楽部」とかいう。おそらく，戦中も特高警察に隠れて敵性芸術を大いに楽しんでいたのだと思う。重ね重ねの非国民である。会場が父の書斎になった理由は，もちろん当時所有していた蓄音機のせいである。「クレデンザ」とかいう舶来物で，幼い私から見ると，見上げるような巨大な機械だった。いわゆる電蓄ではなく，レコードから針で拾った音の波形を，サウンドボックスという雲母で出来た振動版で音にし，そこから長い距離を確保した木製ホーンを通しているあいだに増幅してそのまま音声として聴くという，エジソン以来の原理による蓄音機である［図3，4］。長じてから同じ機種の実際の再生音を聴いたことがあるが，デジタル時代の現代人の想像からは信じられないような良好な音質であった。

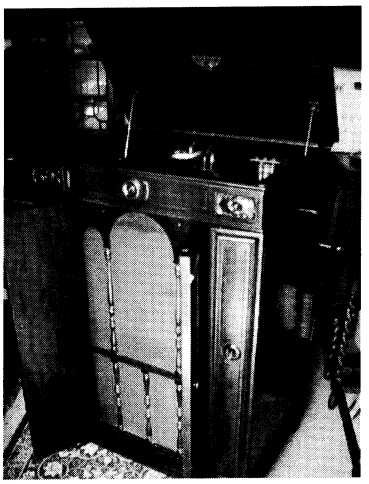


図3　クレデンザ（外観）

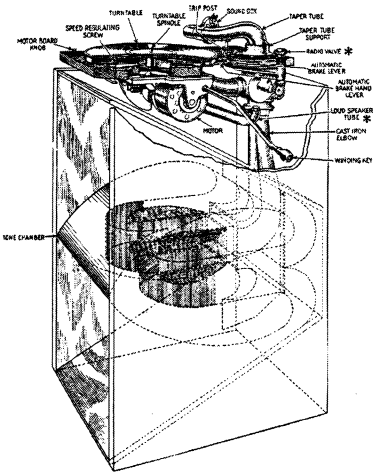


図4　クレデンザ（内部構造）

私は幼すぎてなにもわからないわけだが，私が就寝している時間に，その音が聞こえてきたりしたことは覚えている。父たちはそうした時間を小癪(こしゃく)にも「サロン」などと呼んでいたようだ。昼間に，実際に鳴らしているところも見た。音の出る原理が不思議で仕方がなかった。箱のなかに小人さんが大勢いて，演奏しているような錯覚を覚えた。この小人さんの発想は私が成人し，結婚して子供ができてからも尾を引いて，ステレオやワープロ，電子レンジ，コピー機などの電化製品の原理に関して，ウチの2人の年子の娘に嘘を教えた。しばらくは信じていたようだ。教育者失格である。ウチの子供たちは信じやすく，サンタクロースの存在を小学5年生ごろまで信じていて，親としてはちょっと心配になった矢先，イトーヨーカドーの包み紙で，ことが露見した。

話はもどるが，「第9」という曲名を覚えた。認識としては「大工」だったかもしれない。

1.3.2. 本家の父さん（前編）

当時，本家のほうは父の長兄（つまり私の伯父）が取り仕切っていたが，これもまた父に輪をかけた趣味人であった。この伯父はただただ祖父の蓄財を管理し，かつての味噌蔵を貸したり，少しずつ売却したりして食いつないでいたようである。子供たちは「本家の父(とう)さん」と呼んでいた。

そのころ，まだ祖父は存命だったが寝たきりだった。ほぼ30年間寝たきりの末，享年90で亡くなった。私が19歳のときである。祖父は私をかわいがってくれたのかもしれない。小学5年生の夏休み，東京へ引っ越してから初めて弘前へ遊びに行ったとき（あの武家屋敷はすでに人手に渡っていた），他の従兄弟達もいて，祖父に呼ばれてお小遣いをもらうことになったのだが，他の従兄弟たちには100円札，私には500円札をくれた。たんに渡すお札を間違ったのかもしれない。

その後，伯父が亡くなってから，家作はすべて人手に渡った。あの街なかの広大な地所は「津軽漬」で有名な鎌田屋商店のものになった。だいぶ以前であるが，塀の隙間から石灯籠や大きな梅の古木など，武家屋敷の坪庭の痕跡が一部見えていたが，現在ではどうなっているかわからない。

伯父も戦前の若き日は泉鏡花(いずみきょうか)に凝って文学青年を気取り，実際に不倫，駆け落ちの末，東京に逃げて，湯島・妻恋坂近辺にその愛人と住んでいたという。父も一時どうやらそこに転がり込んだらしい。思うに，兄弟揃ってとんでもなく人の道に外れた道楽息子たちである。商才はまるでなく，使うことしかできない。むしろ商売とは汚らわしいものぐらいに思っていた形跡がある。それを知りつつ，祖父はこの兄弟にお金を仕送りし続けていたというわけである。立派な祖父だったと褒めていいのか，ダメな祖父だったと断じていいものかどうか私には判断が付かない。

伯父は主に古典文学や漢籍(かんせき)の趣味があり，「始皇帝の父」などという小難しい小説を書いていた。読めない漢字がたくさん出てくるのである。戦後，地元の文芸誌にしばらく連載していたようだが，あまりに読者を無視した難解さに編集部がクレームを付けたら，連載をやめてしまった。

1.3.3. 本家の父さん（後編）

本題にもどるが，この伯父は歌舞音曲にも嗜(たしな)みがあり，とくに義太夫節は素人ながら「鶴沢清光(つるさわせいこう)」という芸名をもっていた。若いころに凝って，文楽座のプロに入門していたらしい。終戦直後，弘前に進駐軍がやってきたとき，英語で義太夫を語って軍の高官たちを楽しませていたという。千葉家は，戦後いち早く進駐軍を喜んで迎え入れたというから，もってのほかの非国民一族である。

そういえばNHKに「私の秘密」という番組があったのをご存じだろうか？司会を高橋圭三や八木治郎といったNHKの看板アナウンサーが務めていたので，人気番組だったのだと思う。登場した一般民間人の「秘密」なるものを，文化人と称する複数の有名人が解答者となって，一問一答を時間内に繰り返し，最終的にその「秘密」を当てるというものである。すでに昭和40年代に入っていたと思うが，その番組に伯父が出演したことがある。その秘密とは「私は英語で義太夫を語れます」というものであった。

なにが言いたいのかというと，私が上京する前は，子供たちの「人生勉強のため」という名目で無理やり伯父の義太夫節（弾き語り）を聞かされて，落語の「寝床」とそっくりの状況を味わったということである。

余談だが，弘前にいたころ津軽三味線などは聴いたことがなかった。生前，高橋竹山が言っていたように，津軽三味線はもともと「ボサマ（男性視覚障害者）」の門付け芸として長期間蔑まれてきたという経緯があり，いわゆる金持ちとは縁のない音楽だったのである。時代は変わって，津軽三味線は民謡系の独奏楽器として脚光を浴び，確固たる地位を築いた。

ところで，父はもはや居候の身分を続けられなくなったか，あるいは弘前にも飽きてきたのかもしれないが，上京を決意する。

2. 小学校時代　昭和 30 年～ 35 年

2.1. 導入

2.1.1. 上京

私の一家 4 人は昭和 29 年 9 月に上京した。この年の 9 月 26 日，青函連絡船「洞爺丸」の沈没事故があった。台風 15 号（通称マリー）が引き起こした暴風と高波のためである。死者・行方不明者合わせて 1,155 人という日本海難史上未曽有の大事故となった。

東京は京都以前に両親が在住していたところである。あたりまえだが，私にとっては初めての東京ということになる。弘前駅までは乗合馬車に乗った記憶がある。列車は三等の自由席。おそらく，上野まで 21 時間ぐらいかかったのではないかと思う。上野に着いて，構内の広さと圧倒的な人の多さ，また，初めて見る路面電車に驚愕した。絵に描いたような「おのぼりさん」を演じたわけである。

家は北区中里町 325 番地にあった。この家もかつて祖父が購入したものだった。東京に着くや，たちまち近所の悪ガキどものコミュニティーにちゃっかりと溶け込んだ。コミュニティーの勢力図を見極めることに関しては，本能的な鋭い勘の持ち主だったようである。この勘は以後もいろいろと役に立った。ときどき津軽弁が出た。周囲のガキどもに指摘されて，ハッと気づき，次第にいわゆる「東京弁」（おそらく「標準語」ではない）に慣れていった。津軽弁は小学校低学年ぐらいまでは気を許すと出てしまった。なにしろ，わが家の公用語は津軽弁だったからである。江戸っ子の江戸弁に憧れた。

2.1.2. 家

私の家があったあたりは戦災で焼け残った住宅密集地で，私の家自体も関東大震災以前から建っていた 2 階建ての木造家屋だった。武家屋敷とは月とすっぽんのボロ家で一家 4 人暮らしていた。よく台風で吹っ飛ばされなかったものだ。外れそうになっていた 2 階の雨戸の戸袋を台風が来る前に釘で打ち付けて，「これで安心」と台風をやり過ごしたが，次の日の朝点検してみたら，釘は表面に突き刺さっていただけで，戸袋は完全に浮いたままだったことが判明したこともあった。むかしの家なので，一応，猫の額ほどの庭があり，大きな桐の木やアオキ，ツツジなどが生えていた。加えて，門と玄関のあいだの踏み石の上方には藤棚があって，桐の木に巻き付いている藤の蔓が 5 月になると大きな花を咲かせた。ケムシには閉口したが…。

この家を両親は「蓬生の宿」と呼んでいた。私はまだ「源氏物語」を知らなかったが，父の蔵書で「源氏物語絵巻」［図 5］を見つけて意味がわかった。この家は実に頭の悪い間取りであった。トイレへ行くためには，家のすべての部屋（今度は狭い！）と玄関まで通過しなければたどり着けなかった。したがって，やはり冬は「おまる」が必須だった。

家が建っていた場所は，火事になっても消防車が入って来られないような狭い道路（路地）の一角で，その路地が近所のガキどもの遊び場だった。もっとも，そこで暮らした 7 年間火事はなかった。その後のことは知らない。

図 5　国宝・源氏物語絵巻「蓬生」（徳川美術館蔵）。画面右側に注目

2.2. 小学校

2.2.1. 入学

昭和30年4月，近くの公立小学校北区立滝野川第七小学校（通称・滝七）に入学した。この小学校は，国民学校が戦災で焼失した後，新制の小学校として新たに開設されたものである。2歳年上の姉が前年，弘前の和徳小学校（2年生）から滝七に転校したときに，4年生までしか在籍していなかったというから，私が入学した年には，5年生までが在籍していたということになる。1年生は1クラス40人程度で4クラスあった。学級委員を何期も務めたので，一応，優等生を演じていたのかもしれない。しかし，これがいけなかった。優等生の座に胡坐(あぐら)をかいて，家で勉強をするという習慣を身に着けられなかった。勉強は学校でするものと思い込んでいた。友人の母親たちから「千葉くんは勉強しなくても出来るからァ」とおだてられて，そうかもしれないなどと納得していたのだが，よくよく考えてみると，あるいはその母親たちに「してやられた」のかもしれない。私が勉強していないときに友人たちはせっせと将来のために家で勉強していた可能性がある。もっとも，当時の公立小学校のレベルでは学校で勉強するだけで十分に間に合った。

とくにイジメはなかったように思う。あったのかもしれないが，こちらが気づいていないだけということもあり得る。とはいえ，私を目の敵(かたき)にする者も少数いた。○○武郎(たけろう)（低学年時代）と△△忠夫（高学年時代）である。覚えてろよ！この○○君は学年が進むにつれ，だんだん勢いがなくなっていった。6年生のころは，むかしいじめた旧友より体格も小さくなり（相手のほうが早く成長したにすぎない），逆に威嚇され，むしろイジメられていた。栄枯盛衰，驕(おご)る平家は久しからずということであろう。この○○君，中学以後は私とは銭湯(せんとう)で裸でしみじみと思い出話などをする間柄になり下がった。この私もなかなか大きくなれず，身長が伸びたのは高校に入学してからである。充実期は64歳の現在に至るも未だに来ない。もうひとりの△△君が私にちょっかいを出すのは，きわめて不器用な歓心の買い方だったのであると，のちにクラス会で判明したので許した。

2.2.2. 低学年の担任

低学年（1年～3年）のときの担任はA先生だった。体格がよかったので，「力道山(りきどうざん)」というあだ名が付けられていた。ただし，それほど有能な教師ではなかったように思う。私の体験でそう判断するのだが，たとえば女子（おそらくイジワルな女子）が「千葉くんにこういうことをされた」と担任に告げ口をすると，本人にそれを質す前に罰を与える。当時の罰はゲンコツである。告げ口をした女子としては歓心を買う手段だったのかもしれないし，もっと勘ぐれば，私が関心を示さないことへの報復だったのかもしれない。実際には身に覚えのない冤罪(えんざい)が多かった。冤罪のため，私の母が徹夜で折紙のくす玉を作ったことがある。要するに，私が級友のだれかが作ってきたくす玉を壊したというわけである。小学生が徹夜できるはずはないのだから，この教師は私の母に罰を与えてしまったことになる。まだある。私が持参したボールを○○君が横取りして給食中の教室で投げ，それがだれかのお皿に命中してしまい，ボールの持ち主の私が責任を取らされて，それを食べるハメになったことがある。むろんそんなものを食べられるわけがないので，私はパンのなかにそのおかずを全部挟み，布巾に包んでランドセルに仕舞ってしまった。あとから，体に悪いからと別のお皿が出されたが，遅い！これで赤痢にでもなったらどう責任を取るつもりだったのだろう？だいいち，実行犯の○○君へのお咎めはどうしたのだ！けっこう，こうしたことが多かった。もっとも許せないのは，児童の1人を孤立させるというやり方である。低学年の音楽の授業は担任が受け持っていたが，その音楽の授業で，前回教えたメトロノームを手に取り「この道具の名前をなんというか？」と言って，はじめは1人ひとり指名していたがだれも答えられず，次第にイラついてきているようだった。しまいに「だれか知っている者はいるか？」と言ったので，私が「メトロノーム」と答えたら，私のみを除いて全員にゲンコツを喰らわせた。前回習ったことを忘れているほうもどうかと思うが，ゲンコツを喰らわなかった1名が孤立するとは考えなかったのだろうか？あるいは，わざと孤立させようと思ったのだろうか？ではなぜ？いろいろ疑問である。

この教師はアキレス腱を切る大けがをして，3年の担任を受け持てず，私たちの組は他の3つの組に分割されて3年生の大半を過ごした。私は正直「助かった」と思った。

以上は担任の話であって，私は別に暗い低学年時代を過ごしたというわけではない。同じ机の右隣に座っていた永井千晶ちゃんという色の白い細くて髪の長い女の子とオトモダチになり，入学したその日のうち

に手をつないで自分の家に連れてきたぐらいのパッパラパーだったから…。

2.2.3. 高学年の担任

低学年の担任はそんな感じであったが，4年生以降，私の先生ウケは悪くなかった。私の側からいえば，先生方は私をよく理解してくれて，受け止めてくれた，ということになるだろう。職員室が遊び場のひとつになった。たんに片づけや掃除などに利用されていただけかもしれない。謄写版の台の下をよく掃除させられた。しかし，そこで遊ぶのを黙認してくれた4年生から6年生までの担任，伊藤一郎先生には感謝の言葉もない。先生は当時30代前半だったと記憶している。私の両親によれば，伊藤先生は顔立ちが歌舞伎の隈取（くまどり）にそっくりだったので，「隈取先生」と呼んでいた。ご本人は知る由もない。正確に言えば隈取そのものではなく，当時私の家で使っていた茶筒の模様が隈取を図案化して配置したもので，それにそっくりだったのである。その顔立ちの通り，むかし風の厳しい先生だったが，大好きだった。優等のなかよし男子3人組で，正月に先生のお宅へ遊びに行ったこともある。おせち料理やお汁粉をご馳走になったり，ゲームをしたりして遊んだ。とても楽しかった。あるとき，伊藤先生は「千葉くんはクラスの太陽みたいだね」とまで言ってくれた。

一方，このころになると女子からも「千葉クーン，潤ちゃーん」などと黄色い声で呼ばれて案外まんざらでもなく，いい気になっていた。家にまで遊びに行ったり，あるいは病欠のお見舞いに来てくれるような女子の友達も多かった。その意味では総じて幸せな小学校時代だったというべきであろう。

男女関係については，まったくの「オクテ」だったため，相手がどのような気持ちだったかは知らないが，こちらとしては全員たんなるオトモダチだった。このオクテは相当長期間続き，信じられない話だが大学へ入学してからも続く。

2.2.4. 位置関係

滝野川第七小学校は「近く」と言っても，家から徒歩10分ぐらいはあった。途中，圓勝寺（えんしょうじ）という浄土宗のお寺があって，その墓地の脇は長い下り坂になっていた。坂の横は崖になっていて，当初，柵は鉄道の枕木を再利用したと思われる杭がかなり疎な配置で立つのみで，だれでもくぐり抜けることができた。その下を山手線（やまのてせん）（田端－駒込間）の線路が走り，またその下に貨物線の線路があった。貨物線は小学校低学年のころまでは普通に蒸気機関車が走っていた。汽車が通過するときに，私はよく貨物線の陸橋の上にいて，多量の煙と水蒸気が下から噴射されるのを楽しんだ。あの匂いもけっこう好きだった。むしろ電気機関車はまだ少なく，だれかが「おーい電関が来るぞ」と言うと，急いで見に行ったりした。

柵がないに等しい崖の坂道を下り，山手線の無人踏切と貨物線の陸橋を渡って6年間小学校へ通った。考えようによっては，かなり危険な通学路だったように思う。小学校のもう少し先へ行くと，正岡子規の墓所があった。踏切は当初遮断機がなかった。人が轢（ひ）かれた直後というのを何度か見たことがある。

2.3. 生活

2.3.1. 生活水準

弘前時代は曲がりなりにも使用人がいたような環境だったので，東京でも同じようなものと思っていたら，まったくそうではないことに徐々に気づき始めた。要するにビンボー（今風に言えばボンビー）なのである。つまり，父は戦前から疎開時代までは祖父の蓄財で生活していて，それをあたりまえのように享受していたのが，急に自分の才覚で喰わなければならなくなったということである。戦前は，台湾の製糖株を大量に所有していたというが，敗戦ですべてパーになった。蓄財もそろそろ枯渇し始めていた。父は『それから』の代助のような境遇になったというわけである。おまけに2人のこぶ付きである。父の肩にかかった責任の重さは察するに余りある。といってほかになにもできないので，手に付けた職だけで生活しなければならなくなった。美術学校をちゃんと卒業していたらよかった，と思ったかどうかはわからない。ただ，昭和30年当時，周りも似たり寄ったりの生活水準だったので，それほど気にはならなかった。気になってきたのは，サラリーマンのお父さんの家庭がだんだん豊かになっていくように思えてきたあたりからである。それはおそらく小学校高学年から中学生のころだろう。

長いあいだ，「お父さんはなにをしているの」と訊かれるのがいちばん困った。たいていの子供は「会社へ行っています」と答えるのだが，ウチの場合は「いつも家にいます」ということにしかならない。「絵を描いています」と言えばよかったのかもしれないが，当時，それが「会社員」と同列の正式な職業とは

思わなかった。父が主になにをやって生計を立てていたのかは，正確には多少謎だが，美術に関するなにかはやっていたはずである。むろん，オリジナルの作品も描いていたが，それで喰えるほど世の中は甘くない。古美術の補修の下請けなど（オフレコだが国宝もあった！），いくつか知っていることもあるが，今ここでは詮索しない。話は変わるが，父は洋服を着たことがなかった。ハダカという意味ではなく，和服オンリーということである。友人たちは「浴衣」と言っていたが，当時すでに和服といえば浴衣しか見たことがなかったのかもしれない。

2.3.2. 不登校児童

結局のところ，小学校は自分としてはなかなか楽しかったので，いろいろな思い出があるが，どうしてもここで白状しておかなければならないことがひとつある。私は今の「不登校児童」のハシリだったかもしれない。とくに登校したくない理由はないのに，なんだか学校へ行きたくない日があるのである。

弘前時代とはちがい，東京に来てからは水や空気が悪かったせいか，それほど健康ではなくなってきた。ボンビーだったので栄養状態の悪さも考えられる。おまけに，母（大正10年生）は弘前から五能線（ごのうせん）に乗ったさらに田舎の木造（きづくり）という町にある旅館のお嬢様育ちだったので（旧・県立五所川原（ごしょがわら）高等女学校出身），料理音痴だった。したがって，家での食事は義務のようなもので，私にとって楽しみというわけではなかった。お金がないからいい食材が買えないのだと反論していたが，疑問である。

話はもどるが，「今日は学校へ行かない」というと，当然の反応として母が怒って登校を促すが，父のほうは（つまり，この父は家にいるわけだ）「では明後日（あさって）から行け」と言って放っておく。「明日行け」と言わないところがこの父のことだけはある。明日学校へ行く義務が生じると，今日の欠席がまったく面白くなく，意味がなくなることを知っていたのである。自分の体験にちがいない。

とくにどこか体具合が悪いわけではないので，退屈で仕方がない。遊びたくても相手は学校にいる。だから，父が所蔵していた古い美術書や自分のために買ってもらった『科学大観』とかいう全24巻のマガジンブックのようなものを熟読するのが好きだった。おかげで，たとえば美術書では「餓鬼草紙（がきそうし）」[図6]などを見て，子供ながら「このようなあさましい姿にはなりたくないものだ」などと真剣に思ったりした。また，『科学大観』からは「相対性原理」の存在を知った。むろん，存在だけである。今の小学生は「相対性原理」の簡単な理屈なら当然知っていることだろう。

マンガも読んだ。それも大量に読んだ。当時は「貸本屋」という商売があって，5円とか10円で1泊できるのである。何度も借りたお気に入りのマンガがあって，あるときその本が見つからないので店のおじさんに訊くと，ぼろぼろになったので，もう店には出さないつもりだと言った。それでも貸してくれと頼んだら，そんなに欲しいならあげるよと言って私にタダでくれた。ぼろぼろにしたのは私である。

図6　国宝・餓鬼草子（部分。東京国立博物館蔵）

図7　重文・寒山拾得図（東京国立博物館蔵）

2.3.3. 不登校児童と父

学校を欠席していると，ときには父が「博物館へ行こう」と言って，上野の東京国立博物館へ連れて行ってくれた。ウィークデーの日中である。特別展があるときではなく，多くは常設の展示を見に行くのである。むろん，特別展があるときには特別展も見た。何度も行っているうちに，だんだん書画骨董に興味を

もち，しまいには目利(めき)きになってきてしまった。博物館の収蔵品のうち，中国の元時代の画家である顔輝(がんき)の「寒山拾得図(かんざんじっとく)」［図 7］に心ひかれた。父に複製を買ってもらい，家にあった適当な額に入れて，成人して結婚してからもどこかには飾っておいた。この額はどうも父が大事にしているものだったらしく，しばらくはそのままにしておいてくれたが，ある日，同じ大きさの安物の額に取り換えられていた。少々不服ではあったが，今では，中身を放り出さずに代替品を探してセットしてくれた心遣いのほうを大いに評価したいと思っている。

そのころに得た古美術の知識はもうすっかり忘れ，鑑賞眼も鈍ってしまった。

2.3.4. 不登校の口実

ずる休みに関連して健康の話だが，小学 4 ～ 5 年生のころ膝や肘(ひじ)の関節に痛みを覚えるようになり，医者などにも行ったりしたのだが時期が来ると治ったりするので，正しい病名を知ったり，それを根治することはしなかった。痛かったときも痛くなかったときも，学校欠席の理由はほとんどこれによる。大人になってから，どうやら膠原病(こうげんびょう)系の疾患であるらしいことがわかった。根治はなかなか難しい。場合によっては，年齢とともに次第に薄れることもあるので，この体質となかよくやっていくほかはない。

この体質については，大学院在学中に，人に教えられてある名医のもとを訪れたことがある。この「名医」は，当時，銀座で開業していた偏屈な老人で，いろいろと問診をしたあと得体のしれない自作の電磁機器を私の体中に当てて診察をし，「君が自分で思っているほど悪くはない。この体なら 70 点はあげられる。大学院だって？前途は洋々たるものじゃないか」などと好意的に対応してくれていた。そのうちに私がうっかり「どうしても我慢ができないときは，副腎皮質ホルモンを使っています」と口を滑らしたら，「なんだと！なんということをしているんだ，君は自分の人生をメチャメチャにしてしまいたいのか。帰れ！」と，ものすごい剣幕で怒られた。お金を払ってこんなに怒られたのは初めてである。家の近所の医師（私立病院の院長だった）の所に「痛い」と言って行くと，医師は例外なく副腎皮質ホルモンを投与した。服用すると劇的に痛みが引くので，長いあいだこれに頼っていたのである。しかし，これをやっていると，本物の副腎が横着をして大切なホルモンを分泌しなくなるので，むしろ健康を害することになるわけである。また，この薬は副作用が多く，投薬する医師には相当の慎重さが求められる。

それ以後，銀座の名医のもとには行かれなくなったが，問診のときに「大脳コントロール」という方法を伝授されたのを思い出した。これはきわめて原始的な方法で，たとえば中座ができないような重要な会合に出席しているようなときにトイレに行きたくなった場合，「今は立つわけにはいかない。あと 20 分で会合は終わる。平気，平気」などと，必死で尿意・便意を隠ぺいする方向に意識を逸らそうとするアレである。簡単に言えば「我慢」という。このコントロールはかなり有効で，このとき以来，今日に至るまで自分としては相当うまくコントロールできていると自負している。体質を克服したというべきかもしれない。あの医師はやはり「名医」だったようだ。

2.4. 小学校時代の音楽環境

2.4.1. 隣人（その 1）

東京の北区中里町の家の隣に，福岡文枝さんという中学校の音楽の先生が住んでいた。高知県出身で，どうやら声楽専攻であったと思われる。声や発音のきれいな人で，私を「じゅんちゃん」と呼んでくれるのだが，私には「Juntian」と聞こえた。

いい時代というべきか，当時は家に鍵をかけるような習慣はほとんどなく，したがって，少なくとも日中であればだれの家にでも無断で出入りできた。友人の家に遊びに行き，その友人がいなくても上り込み，夕方までお邪魔して，そのまま夕飯をいただいて帰ることなどは日常茶飯事だった。

それで，お隣の音楽の先生の家にいつも無断で入りびたりしていた。お目当ては，当時はなかなか触れることもできなかった本物のピアノ（アップライト）と，レコードを聴く装置である。ということは，潜在的に音楽（とくに洋楽）には関心をもっていたということになるだろう。これがきっかけとなって，その後ピアノが上達し，有名なピアニストになった，などというのはいかにもありそうな話だが，そうはならなかった。もっとも，ほんの一時期，この先生にピアノを習った記憶がある。どうも，あまりピアノそのものには関心がなかったようである。ペダルが付いたピアノでのみ可能な和音の響きのほうに興味があったらしい。学校やオトモダチの家にあるような足踏みオルガンでは指を離すと音が消える。それで，

勝手にピアノを開いていつも好き勝手にめちゃくちゃな和音の進行を奏でて悦に入っていた。

また，レコード再生装置も勝手にスイッチを入れて，その家にあったレコードを聴いていた。レコードの裏表に入っていたメンデルスゾーンとチャイコフスキーのヴァイオリン・コンチェルト（ジノ・フランチェスカッティの演奏）はお気に入りで，よくひとりで聴いていた。レコード・ジャケットもありありと目に浮かぶ。そこに写真印刷されていたフランチェスカッティのヴァイオリンを弾く姿を，なんの根拠もなくチャイコフスキーだと思っていた。

それにしても迷惑な子供だったことだろう。いろいろ余計なことをやらかして，こっぴどく叱られたことも1度ではなかった。しかし，こうしたことを許していたお隣の音楽の先生の心の広さはもちろんだが，おおらかな時代風潮には感謝しなければならない。もっとも，最低限のマナーは守らされた。レッスンなどの来客があるときはお出入り禁止。ピアノに触るときはその旨許可を得て必ず手を洗うこと。レコードを聴くときもこれに準ずるが，加えて厳重に守らされたのは，レコードの溝には絶対に手を触れないことである。これに違反したときはすぐに追い出された。そして，次の日にまた行く。

この福岡先生はのちにご結婚されて櫻田姓となり，門に鍵もかけられ，もう勝手に出入りすることはできなくなった。

2.4.2. 隣人（その2）

お隣の音楽の先生のレッスンでは鮮烈な記憶がある。あるとき，私より1歳ぐらい年上の小学校6年生の知らない少年（お兄ちゃん）が，歌のレッスンに来ていた。このときはなぜか追い出されなかった。私に刺激を与えてやろうという親心というか教育者的な心づもりがあったのかもしれない。その少年は開成中学校という関西の灘校とならぶ都内有数の中高一貫進学校への進学が決まっているとも言っていた。そんな優秀な少年が歌のレッスンに来た理由は，東京少年合唱隊への入団試験のためということだった。当時，この合唱団は少年だけで少女はおらず，たいへんにハイレベルの本格的な少年合唱団であった。ほどなく東京少年少女合唱隊と名称が変わり，創立60周年を迎えた現在は少女のほうが圧倒的に多くなっている。日本では少年聖歌隊の伝統がないせいか，優秀な少年合唱団は育ちにくいようだ。

6年生だと年齢的に遅いのではないかと感じるかもしれないが，当時はまだ現在よりも声変りが遅く，中学生までは普通にソプラノが出る少年がいた（場合によっては高校1年ぐらいまで）。したがって，中学生になっても声変りするまでは合唱隊に在籍できて，普通にトレードマークの短い半ズボン（だらしのないハーパンではない）をキリッと穿いて歌っていたものだ。第二次性徴がまだ来ていないわけだから，全然構わないのである。蘊蓄になるが，バッハ時代は17～18歳ぐらいまで平気でソプラノが出せたそうである。あの難しいソプラノ・パートを少年聖歌隊のソリストが歌うことができたのは，こうしたことも理由のひとつになっている。それで，私はこのとき生まれて初めて目の前でボーイソプラノというものを聴いた。このお兄ちゃんは人なつこい都会風の垢抜けした美少年で，「ねぇー，一緒に歌おうよー」などと蕩けるような甘い声で誘ってくれたが，そのお兄ちゃんの歌声に気おくれして…，いや，正直に言おう。そのときは「これなら自分にもできるんじゃないか」と思ったはずだ。だから，お兄ちゃんの歌声そのものよりもむしろ，いかにも裕福そうなご家庭のお坊ちゃんらしい凛とした洗練された佇まいのほうに完全に圧倒されてしまって，ボンビーな田舎者の私は以後，歌うことが大嫌いになってしまった。トラウマというべきであろう。今でも，積極的には歌おうとしない遠因がここにある。たぶん，内心このお兄ちゃんに憧れた（恋した）のだと思う。もっと言えば，自分がこのお兄ちゃんになりたかったのかもしれない。

私がもう中学生になっていたから2年後ぐらいのころだと思うが，姉が購読していたある少女雑誌で，このお兄ちゃんが合唱隊のリーダー的な存在になっている記事を見た。当時はローティーンのアイドルなどいないので，少女雑誌ではウィーン少年合唱団やパリ木の十字架少年合唱団などが特集として大きく取り上げられていた。ピンナップ写真やブロマイドなども，少年合唱団のメンバーのものが多かった。お兄ちゃんの記事にはグラビア写真も掲載されており，たぶんお兄ちゃんは少なくとも中学2年生以上（14歳）にはなっていたはずだったが，ちゃんと定番の半ズボンで歌っていた。

この鮮烈な記憶というか，あるいはその反動からか，ボーイソプラノは64歳の現在に至るまで，ずっと気にし続けている。これを私は「隠れボーイソプラノ」と呼んでいる。50代に入るまではそのジャンルのレコードやCDなどにはつとめて無関心を装ってきたが，内心欲しくて仕方がなかった。いい歳をしたおじさんがレコード屋さんでボーイソプラノ関係のCDばかり買っているという図は，ある意味ブキミ

である（日本のレコード屋さんではあまり売っていないが）。インターネットで世界中のものがなんでも買える匿名の時代だからこそ，自分に対して解禁したのである。ついでながらひとつ申し上げておきたいのだが，あのボーイソプラノという事象自体が，かなりアブナイ世界なのではないかと私は考えている。私は父の影響で，そもそもアブナイ世界が嫌いではない。それで，実はボーイソプラノ関係のCD（一部VHS・DVDを含む）を現時点で数百点所蔵している。

お隣の音楽の先生の親心が成功したのか失敗したのかはわからない。少なくとも，先生が当初想定された結果にはなっていないのではないかと思う。

2.4.3. プレーヤーとテレビ

お隣にあったレコード再生装置は，一般のラジオにつなぐと音が出るという簡易なもので，ラジオ側にもその入力端子が付いていた。ステレオなどが一般化する前は，多くの家庭でこれを用いていた。ウチでもこれが欲しいとずいぶんねだったような気がするが，そもそもラジオがまだ家にはなかったのだから，どうしようもない。小学3年生のころにやっとラジオを買い，また，しばらくたってからようやくラジオにつなぐプレーヤーを買ったかと思う。世の中はテレビ時代を迎えていた。むろん，近所のガキどもの家にはまだテレビなどはなく，いち早く導入したのは，お隣の音楽の先生と，路地1本離れた家に住んでいた母子家庭だった。

余談だが，この母子家庭は，とあるお金持ちの愛人（妾）であったことをずっとあとになってから教えられた。当時，その家には美しい母親と私より幼い学齢前の女の子がおり，近所のガキどもの姉妹とはちょっと雰囲気のちがった，おしゃれなカワイイ女の子だった。いわば「日陰者」の母子家庭の一種陰のあるオーラを感じとって，そこに魅力を感じていたのかもしれない。私はこの子をすごく大切にしてよく遊んであげた(遊んでもらった？)。もしかすると初恋なのかもしれない。オクテのわりには惚れやすい。たしか「洋子」ちゃんという名前だったと思う。苗字までは覚えていなかったので電話で姉に訊いてみたら，Yさんというお宅だったことがわかった。そこのお母さんは子供のことを考えたのか，近所のガキどもを大いに受け入れた。したがって，テレビの子供番組があるときには10人前後のガキどもが洋子ちゃんの家に集まった。「ロビンフッド」「鞍馬天狗」「スーパーマン」などを毎週見に行った。面白いことに，ガキどもには一種の紳士協定のようなものがあって，毎週1回木曜日の夕方のみしか洋子ちゃんの家にお邪魔してはならないことになっていた。木曜日の子供番組が充実していたからである。親同士の協定だったかもしれない。私も洋子ちゃんの家には木曜日しか行かれないので，洋子ちゃんとはもっぱら外で遊んだ。まれに，洋子ちゃんの家に風采が立派で上品な紳士が訪れるのを目撃したが，たぶん，あの人が洋子ちゃんの父親だったのだろう。

テレビといえば，昭和34年の皇太子殿下（今上天皇陛下）御成婚記念パレードは洋子ちゃんの家ではなく，お隣の音楽の先生の家に魔法瓶と食料持参でウチの一家全員で押しかけて見物した。先生は音楽番組があると私を呼んでくれて，フジテレビの日フィルアワー（渡邉暁雄指揮）は毎週のように見に行った。そのほかにもクラシック音楽を特集した番組があると，一家中でお邪魔した。カラヤンの指揮ぶりを見て，指揮者というものに憧れた。

2.4.4. レコードとラジオ

ラジオを買い，それにつなぐプレーヤーを買ったが，聴くのは弘前から運んだ数セットのSPレコードだった。主なものはバッハのブランデンブルク協奏曲第6番(ブッシュ合奏団)，同じくバッハの無伴奏チェロ組曲第4番，第5番（カザルス），ヘンデルの王宮の花火の音楽（ビーチャムの指揮だったか…，サージェントだったか），ベートーヴェンの第9の第4楽章のみ（ワインガルトナー指揮），同じくベートーヴェンの弦楽四重奏曲第10番「ハープ」(カペーSQ）と第15番（レナーSQ）などなど。このラインナップで父の洋楽の趣味傾向が知れる。そういえば，アルバムのなかに1枚だけ孤立して，カルーソーが歌ったマスネーのエレジーがあった。助奏ヴァイオリンは若いころのエルマンだったような気もする。ひどく古いもので，裏面には溝もレーベルもなく，のっぺらぼうのようだった。音もシャリシャリ・ノイズのはるか向こうからカルーソーらしき歌声が聞こえてくるといった具合だったが，今だったらお値打ち物なのかもしれない。私がもっとも気に入って，小学生のころよく聴いていたのがベートーヴェンの弦楽四重奏曲第15番Op.132であった。そもそも擦り切れる直前のレコードだったが，完全に擦り切れるまで聴いた。今では一部を除きすべてCD化されて市販されている。そうしているうちに，父の趣味でLPレコードが

少しずつ増えた。とはいっても，1年に2～3枚ぐらいのものである。絶対量が足りないので，そのほかはもっぱらラジオ放送で音楽を聴いた。

むかしのAM放送は現在よりよほどクラシック番組が多かった。また，たまにステレオ放送というのがあって，NHK第1と第2がそれぞれ左チャンネルと右チャンネルを同時放送し，ラジオが2台ある家庭ではステレオを楽しむことができた。民放でも，たとえばニッポン放送と文化放送が提携してステレオで放送していた。家にはラジオが1台しかなかったので，ちゃんとしたステレオ放送の受信はできなかったが，当時，小学生男子のあいだで流行していたゲルマニウムラジオを代用して，なんとかステレオにして聴き，その立体的な音響に驚いた。ゲルマニウムラジオとは，ゲルマニウムダイオードを検波器として用いた簡単なラジオで，増幅装置は付いていない。したがって，入力感度の高いクリスタルイヤホーンを用いて，検波された音声信号をそのままイヤホーンで聴く仕組みになっている。だからボリュームの調整は出来ず，据え置きのラジオの音量をうまく調整するか，あるいはラジオとの距離を調整するかして，なんとか聴いていた。のちに，ゲルマニウムラジオをもう1台買い，両方の耳にイヤホーンを入れて聴いたときの感動は今でも忘れられない。こうした体験をもつだれかが，「ウォークマン」を開発したのかもしれない。

2.4.5. スコア

父が弘前から運んだもののなかに，スコアがあった。ここでいうスコアとは全パートが記された楽譜のことである。戦前のSPレコード全集には，スコアが付属しているものが多かったようだ。いろいろあったが，曲というよりは，譜面上に記された音符や記号のパターンに魅せられた。カッコイイと思った。いわば，譜面を一種のデザインとして認識したわけである。小学校低学年のころ，五線が引いてある音楽ノートを買ってもらって，自分で独自にデザインして楽しんだ。音にしたことはない。あるいは前衛的な現代音楽になっていたかもしれない。この遊びを通じて，いわゆる初歩的な楽典の知識を学んだと思う。

それで思い出した。私が結婚するときに，よくつるんで遊んでいた作曲専攻の親友3人（池田一秀，渡部賢士，新倉健）に，白紙に近い五線紙を送りつけて「なんでもいいから1声部書いてくれ」と依頼したことがある。白紙に「近い」という意味は，音部記号（それぞれト音記号，ハ音記号，ヘ音記号），拍子記号（4/4拍子），小節数（16小節），開始のタイミング（冒頭に休符），終止音（最終的にC-durの主和音基本位置），最大音域（それぞれVn.Va.Vc.に該当する音域）は規定しておいたからである。この3者別々の楽譜（パート譜）を，披露宴当日にぶっつけ本番で弦楽三重奏曲として演奏させてみたのである。演奏者はすべてプロの友人たちである。テンポの設定とディナーミクなどは当日私が決めた。3人が作曲時点で示し合わせていないことは私が保証する。なかにはバージョンちがいを3種書いてきた者（渡部）もいたが，なるべく現代音楽風なものを私がひとつ選んで演奏させた。曲名は「婚礼祝典序曲」。音響としても音楽的なまとまりとしても見事な現代音楽が出来上がっていた。このとき，なにかを会得したような気はしている。

話はもどるが，スコアは中学生になってからも好きで，どこかへ出かけるときに必ず1冊は持って出た。大きさがちょうどよかったのか，ブランデンブルク協奏曲が全曲入ったスコアはよく持って歩いた。ほどなく角が擦り切れてきて，最後には分解してしまった。

2.4.6. ヴァイオリン

小学3～4年生のころに，当時，吉祥寺に住んでいた弘前「ウィーン倶楽部」のお仲間だったF氏から，父が1/2の鈴木ヴァイオリンをもらってきた。F氏の子息が使っていたもので，子息が成長してしまったので，そちらの息子さんにどうぞということで，私のためにもらってきたらしい。このヴァイオリンを弾いて，のちに有名なヴァイオリニストになるというのも，ありそうな話だが，そうはならなかった。私はたいへんに興味はあったものの，あのヴァイオリン以外の何物でもないケースを持って習いに行くのがどうしても恥ずかしくて，結局，弾かなかった。父が怒って，以後このヴァイオリンには触らせてもらえなかった。むしろヴァイオリンは姉が中学生になってから習い始めた。姉はその後途切れることなくヴァイオリンを嗜んでいる。アマチュア・オーケストラをやったり室内楽を楽しんだり，銀行を定年退職した現在もヴァイオリンは片時も離さない。私は「アマチュアの鑑（かがみ）」と呼んでいる。イタリア18世紀のガリアーノという身分不相応な（技量不相応か？）楽器をもっているが，死んだらどうするつもりだろう。気にかけておかなくてはなるまい。

2.4.7. フルート

小学５年生のときに，当時いちばん安いフルートを買ってもらって，勝手に吹いていた。中学になって，銀座十字屋の音楽教室で数年習った。先生は川見禎洪（かわみよしひろ）先生といって，アマチュアだったが技量のあるとても人柄のいい方だった。本職は北区東十条で精密機械を扱っておられたように思う。

フルートは習ったり習わなかったりしながら，大学に入ってからもときに応じて吹いていた。一時は，これで身を立てようと思い，藝大を目指したこともある。そのときは２年間ぐらい宇野浩二先生（文学者のほうではない）に師事した。したがって，実はフルート歴は長い。

そんなだから，小学校の縦笛やハーモニカなどはちょろいものだった。小学生が知っているような曲ならなんでも演奏できた。音楽を専攻して大学に入ってきたような学生さんなら，全員同じような経験をもっていることだろう。小学生時代は，こうした特技のおかげで案外楽に凌いできた。

音楽の授業はあまり印象にない。専科の先生はＩ先生という，フルートを多少嗜む人柄のいい先生だったが，知識では私より知らないことが多かった。というより，ずいぶんとおっしゃっていることの間違いを発見した。ほんの一例だが，縦笛の指使いで，半音上げるときにはどの音でも指孔を半分開けて出す，と自信をもっておっしゃったときには，死んだ。さすがに当時とはいえ，クロスフィンガリングのやり方は知られていたし，運指表にも明記されていた。「クロスフィンガリング」というテクニカルタームはともかくとして…。

2.4.8. クレデンザのゆくえ

上京して以来，疑問に思っていたことがある。弘前にいたころのクレデンザと大量のレコードはどうしたのかということである。そこである日，父にその旨訊いてみたら，父は「お前たちが喰ってしまった」と答えた。あんな硬いものを喰った覚えはないので一瞬ムッとしたが，意味がちがった。よく考えてみると，私たちだけではなく父自身や母も喰っていたはずである。

そういえば，弘前にはフランス製のフルート，どこのだかわからないヴァイオリンやチェロ，古そうな笙（雅楽器）や鼓の胴，その他三味線が何挺もあった。美術品も代表的なものでは，岸田劉生の「麗子像」のうちの１枚（本物！）があった。教科書に載っているような有名なものではないが，正真正銘の「麗子像」である。父の書斎に掛かっていた。当時の姉にそっくりだったので，私は姉の肖像だと思っていた。これらも，おそらく私たちが喰ってしまったものと思われる。後年，父に連れられて行ったある展覧会で岸田麗子女史に会ったことがある。上品で知的な中年女性だった。姉は岸田女史から素敵なブローチをいただいて，長いあいだ大切にしていた。私はなにももらわなかった。電話で姉に「あれはどうした」と訊いたら，「今でも持ってるよ」と答えた。

伯父のほう（本家）の文庫蔵（ぶんこぐら）には，お宝がもっとたくさんあったかもしれない。大学生のころだったかその前だったか，夏に弘前へ遊びに行った折，少なくとも滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』の初版本全巻桐箱入りがあったことは確認している。その他，書画骨董，着物，刀剣，鎧などが仕舞ってあった。伯父の私室には高村光雲（こううん）が彫った大きな翁面も飾ってあった。文庫蔵は２階建てだが，２階の床は床板が密に張られておらず，スケスケになっているので，夏に昼寝するのに涼しくて気持ちがよかった。ただし，ときどき金縛りにあった。

2.5. 小学校時代のその他の思い出

2.5.1.「めっそうかいな」について

「めっそうかいな」とは漢字で書けば「滅相かいな」ということだろうと思われるが，千葉家での取り扱いはかなり特殊である。夜遅く，野外で，一家４人が，円陣を組み，足を踏み鳴らして，「めっそうかいな」と３回唱和するパフォーマンスのことを言う。親せきの家へ一家で遊びに行って夜遅く帰ってきたときなどに，最寄駅の駒込から自宅までのあいだの一定のスペースがあるところで「めっそうかいな」を実行し，人が来ないうちにそそくさと早足で退散する。スペースがちょうどよかったのか，私立の中高一貫校だった聖学院（せいがくいん）の正門前でよく実行した。意味は現在に至ってもよくわからない。小学生のうちはよくやっていた。しかし，あのお嬢様育ちの生真面目な母が一緒になってやっていたとは信じられない。中学以後はさすがにやらなくなったが，家のなかではまだやっていたかもしれない。他人が見たら，ドン引きしそうな狂人一家である。

2.5.2.「馬六流山新聞」について

「馬六流山新聞」とは，小学5年生のころから発行した家族内新聞である。謄写版によるB4版片面1枚を新聞のようにレイアウトしたもので，初めは姉と2人で記事を書いていたが，そのうちに記事を父母や親せきから公募し審査した。むろん私たちも担当した。私は主にコラムや4コマの連載マンガを担当していた。4コマなのに連載の長編である。なにか勘違いしていたのかもしれない。マンガのタイトルは忘れたが，あらすじは覚えている。戦国時代に落城したある領主の幼い若様が，年老いた忍者に助けられて育てられ，厳しい修行の末に美しくも凛々しい少年忍者となり，滅びた自分の国を再興するというグローイングアップ感動巨編である。主人公を自分自身に投影しているというわけだ。このマンガはなかなか先へ進まず，完結する前に私は中学生となり，ばからしくなって新聞そのものが廃刊となった。

ちなみに，「馬六」とは「バロック」のもじりで，姉の筆名。「流山」は「ルネサンス」を私が「ルサンネス」と間違って覚えていたことから，それをもじられた。新聞紙上では，これが筆名となる。ついでながら，同じく新聞紙上では父は「琵琶（この漢字とヨミの響きが好きだという）」，母は「ポック（なぜこの名になったのかわからないが，この間の抜けた響きが嫌いではない）」が筆名である。寄稿してきた親せきたちも，それぞれ特有の筆名をもっていた。この新聞は親せきと知人たちに無料配布された。まさか買う人はいない。小学校の担任の伊藤一郎先生にお見せしたら，面白がってクラス全員に朗読して聞かせ，それで足りずに，校内新聞に紹介記事を書いてくれた。新聞は今でも実家で保存しているはずだ。

この新聞発行のおかげで，初歩的な謄写版の技術をマスターした。原紙の切り方（ガリ版），原紙のスクリーンへのきれいな貼り方，インクの分量や，ローラーを転がすときの圧力・速度などである。黒インクに少量の白を混ぜて，濃いグレーにすると美しく刷り上がることもこのとき知った。その後，赤などを入れて，セピア色にして刷ったこともある。この技術は，長じて，アマチュア・オーケストラの団内報を作るときにたいへん役に立った。

2.5.3. 依怙贔屓（えこひいき）について－鉄道開通八十八周年記念

小学6年生のある日，校内放送で各クラスから3～4人ぐらいずつ呼び出された。呼び出したのは図工の先生である。図工ではよく器物破損とか，思わぬ怪我とか，いろいろな事故があったので，なにかヘマをしたかと思って全員びくびくしながら出頭すると，6年生が11～12人ぐらいいて，図工の石橋和美先生（男の先生である）がおっしゃった。要約すると次のようになる。

・今年は日本に鉄道が開通してから88年というめでたい年にあたる。
・国鉄では，全国（東京だけだったかもしれない）の小学生に鉄道開通88周年にちなんだ壁画を描いてもらい，それを多くの人々に見てもらって，鉄道開通88周年を祝いたいと思っている。
・そこで，滝七からは君たちを選抜して壁画を描かせることにした。
・○月○日の朝から一日中，赤羽駅の構内で通行人に見られながら描くことになるが，やってみるか。

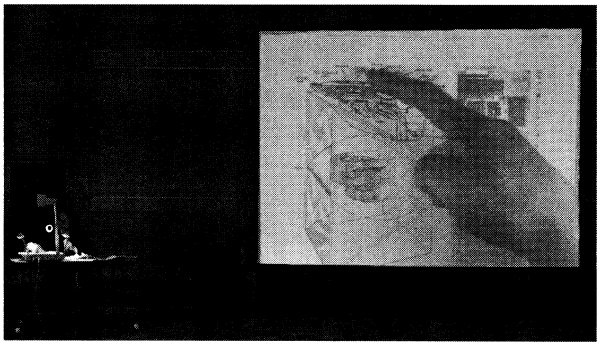
たぶん，そこにいた全員が参加を表明したはずだ。なんという優越感。まさに「撰ばれてあることの恍惚と不安と二つ我にあり」というヴェルレーヌの心境である。ヴェルレーヌよりは相当レベルの低い話だとは思うが，結局，実行した。巨大な板面に，全体の構図から鉄道，人物，建物，背景など，当日計画して，直接鉛筆書きをし，線描し，色を付けていくのだからたいへんである。壁画用の大きな白塗りの板や絵の具，絵筆，パレット，鉛筆などは当日準備されていた。不透明水彩だったがあまり水を使わずに，油絵のような感じで描いたと思う。完成するのに思いのほか時間がかかったが，時間内ぎりぎりで夕方完成した。見事な出来栄えだった。コンクールではなかったので順位はつかなかったが，国鉄のおえら方や他校の校長などいろいろな人から褒められた。監督の石橋先生も，書いているときにはハリセン教師のようにびしびしと怒鳴り散らしたり，私たちもときにはゲンコツを喰らったりしたが，完成した壁画をすごく褒めてくれた。ご自分の人選に間違いはなかったとお思いになったことだろう。これにはご褒美があった。

ご褒美は，壁画に参加した者のみが学校を休んで（公休である）特別編成の列車に乗って沼津へみかん狩りの遠足。ポップな書体で「豆画伯号」とレタリングされたプラカードも各学校に配布された。楽しかったというのはこのことである。優越感に裏付けられた，しかも学校も公に認めた特別な休日に，特定の選抜メンバーだけで1日羽根を伸ばして遊べる。裏を返せば，なんという依怙贔屓の企画だろう。校内で公開審査をしたわけではなく，石橋先生が個人的に画才ありと認めたお気に入りの児童たちを選抜しただけのことである。当然，はじめは校長にこの話がきて，石橋先生に児童の選抜を一任したのだと思うし，各

クラスの担任教諭に打診して了解を得てはいただろうが，今だったらこんな企画はとうてい通るはずがない。教育委員会は絶対に許可しないだろう。なによりも，こうした依怙贔屓を他の父兄が許すはずがない。一方，依怙贔屓をされた側に「不公平」や「不平等」などという考えはまったく思い浮かばず，特別扱いは当然のこととして受け止めていた。しかし，万一自分が選抜されなかった側に入っていたとしたらどうだったろう（その可能性だって十分にあったはずだ）。おそらくプライドをいたく傷付けられて，耐えられなかっただろう。選抜されたことはたいへんに幸運であったとしか言いようがない。

このときに描かれた壁画は少なくとも東京都の分は一定期間，東京駅のどこか広いところにすべて展示された。もちろん一家で見に行った。展示が終了したあと，滝七小学校の朝礼の際に全校児童の前で大々的に紹介され，「豆画伯」たちが名誉を与えられてから，長いあいだ滝七の正面玄関ホールに掛かっていたが，小学校は改築されたし，現在どうなっているのかわからない。半世紀のあいだに老朽化して廃棄されてしまったかもしれない。これを撮った写真でもあったら見てみたいものである。

いろいろあったが，こうして幸せな小学校の6年間が終わった。

幼児期～小学校編　おわり

最終講義で熱く語る千葉先生